# パレット

青緑　黄太郎

そうだ、学校に行こう、とふと思い立ったのは、固い床の上で目を覚ました午前7時のことだ。
むくり、と上半身を起こすと、首と腰と肩が痛んだ。
グレースケールに包まれた部屋の中で、テレビだけがチカチカと光っている。
映っているのは、古い映画のエンドロール。
シルクハットをかぶったおじさんが、変なカッコで踊っている。
頭をガシガシと掻く。
昨日の記憶は――ない。
古い映画を見た記憶も、床で力尽きた記憶もない。
魔訶摩訶不思議。
アイマ川崎市民。
よっこらせとテレビを消す。訪れる静寂。辺りに散乱した自分の抜け殻をかき集めて、洗濯機の中へと放り込んだ。洗剤を適当に掬って、オレンジのボタンをピピピと三回押す。洗濯機はガウンガウンという音を立てて、古の機械のように動き始めた。
その前で立ちすくむ。
眠い。ひどく眠い。
ドドドドドという振動が眠気を誘う。
うつらうつらとしていたら、よろけて柱の角に頭をぶつけた。
洗面所へ移動して、冷たい水でザバザバと顔を洗う。
白いタオルで顔を拭いて、近くの竿に干す。
ふと目の前の鏡を見る。
ミランダ・カー似の美人な女性が映っている。
といいなあ。
首までしかない髪をもう少し伸ばして、マゼンタ色の髪を黒に染めて、目をブルーにすれば、少しは似てるかもしれない。
脇のあたりがじっとりしていたので、ついでにシャワーを浴びることにした。
頭を洗おうとしたら、お気に入りのシャンプーを切らしていた。柑橘系の香りがするやつ。プッシュしてもスカスカ音がするだけだ。
スカ　スカ　スカ　スカ
出ない。
スカ　スカ　スカ　スカ
出ない。
スカスカスカスカスカスカスカスカスカスカスカスカ
カスカスカスカスカスカスカスカスカスカスカスカ
スカスカスカスカスカスカスカスカスカスカスカスカ
カスカスカスカスカスカスカスカスカスカスカスカ
スカスカスカスカスカスカスカスカスカスカスカスカ
カスカスカスカスカスカスカスカスカスカスカスカ
スカスカスカスカスカスカスカスカスカスカスカスカ
カスカスカスカスカスカスカスカスカスカスカスカ
スカスカスカスカスカスカスカスカスカスカスカスカ
カスカスカスカスカスカスカスカスカスカスカスカ
スカスカスカスカスカスカスカスカスカスカスカスカ
カスカスカスカスカスカスカスカスカスカスカスカ
スカスカスカスカスカスカスカスカスカスカスカスカ
カスカスカスカスカスカスカスカスカスカスカスカ
スカスカスカスカスカスカスカスカスカスカスカスカ
カスカスカスカスカスカスカスカスカスカスカスカ
スカスカスカスカスカスカスカスカスカスカスカスカ
カスカスカスカスカスカスカスカスカスカスカスカ
スカスカスカスカスカスカスカスカスカスカスカスカ
カスカスカスカスカスカスカスカスカスカスカスカ
スカスカスカスカスカスカスカスカスカスカスカスカ
カスカスカスカスカスカスカスカスカスカスカスカ
スカスカスカスカスカスカスカスカスカスカスカスカ
カスカスカスカスカスカスカスカスカスカスカスカ
スカスカスカスカスカスカスカスカスカスカスカスカ
カスカスカスカスカスカスカスカスカスカスカスカ

ボトルのふたを取ってひっくり返し、底の方に溜まっていたのが流れ出てくるのを待つ。
そういえば昨日も同じようなことをしたっけ。
ミランダ・カーと間違われたいのなら、この性格も直す必要があるなあ、と思ったりする。
この性格。ポンコツでズボラな性格。
古いがらくたを壊すときの音。
私はおんぼろな車を想像する。車体はレッド。ところどころ塗装が剥げている。エンジン音だけは馬鹿みたいに五月蠅いくせして、全然スピードが出ない。舗装されたストリートはなんとか走れるけど、山道に入るとてんでダメ。がったがった揺れるし、エンジンからは二秒に一回爆発音がするしで、良いとこなし。結局エンスト。スクラップ工場へＧＯ。そんで、ハンマーでポンコツポンコツぶっ叩かれてぺしゃんこになった後、めでたくスチール缶として生まれ変わりましたとさ。
いいね。きっとアメ車だな。私そっくりの。
風呂場から出て、バスタオルで顔を拭く。
なんか強く拭きすぎると、必要以上に油分が多く取れちゃって、肌の乾燥がどうのこうのとか電車の広告がどうのこうの言ってた気がする。
まあどうでもいいんだけど。
まだ三十路じゃないし。二十六だし。
洗濯機の横にある棚から、オフショルダーの服を引っ張り出して着た。マゼンタ。紐が長いタイプのやつで、鎖骨の下のほくろがギリギリ見えるのがポイント。
つまりセクシー。
下は下着のまんまでいいや。なんか暑いし。
居間に戻って緑色のカーテンを開ける。
健康的な日差しがパッと部屋を照らす。
まだ八時ですけど、外はもう暑そうですね。
マグカップを食器棚から取り出す。嘘みたいな青い空と、嘘みたいな白い雲が描かれてる。
ポットに残っていた白湯を注ぐ。
なんか美人の秘訣的な番組で、朝に白湯を飲むと良いって言ってたのをＪＫが話しているのを聞いたって友達が言ってた。プレデター。消化とか代謝を促進してくれるし、むくみを解消しつつ内臓の洗浄してくれて、便秘の予防やダイエット効果にも繋がるとかなんとか。
白湯っえーって思ったから、毎朝欠かさずに飲む。
まあでもその番組で紹介していた朝マスクやら、香りの良いパックやら、おしゃれな目覚ましで目覚めるやらはやってませんけど。
てかおしゃれな目覚ましって何だろうね。タピオカミルクティーでできてるとかかね。もしかしたらＥＸＩＬＥが流れるのかも？
たぶんそうなんだろうな。きっと。
ＥＸＩＬＥがおしゃれかどうかは知らんけど。
たぶん違うな。
お腹が減ったので冷蔵庫へ向かい、あまり期待せずに扉を開ける。
案の定、冷蔵庫の中は惨憺たる状態である。
アクエリアスが一本。開いていない。それから箱に入った無塩バター。だいぶ前に有塩と間違えて買ったやつ。使い道がない。豆腐が半丁。大根のしっぽ。腐った味噌。味噌は元々腐ってるってね。へへっ。これで味噌汁はなんとか作れるね。二枚の冷え冷えのパン。色鮮やかな夏蜜柑が一個。それから醤油。
醤油？
なぜ醤油が冷蔵庫に？
江戸切子の醤油さし。普段は居間のテーブルの上に放置している。持つとベリッていって何か焦げ茶色のこびりついた何かがベリッていう。それがどうだ。今は冷蔵庫の中で異様な存在感を放っている。なぜだ。無駄な存在感。存在感の無駄遣い。
ガシガシと頭を掻く。
日記でもつけようかしら、と思う。
昨日の自分が何を考えてたのかわからん。
まあいいや。
お腹減ったし、取り敢えず味噌汁を作ろう。
金色の鍋に水をじょぼじょぼ入れる。底はべコべコになっていて、いつ穴が開いてもおかしくない。
かつおだしを一パック、大根は銀杏切り、煮立ったら味噌と豆腐を入れて終わり。
パンはキツネ色に。うへへ。ジャムも蜂蜜もないけど私には無塩バターがある。
トーストと雑魚バター、それから味噌汁。飲みものはアクエリアス。これが本日の朝食である。
夏蜜柑もね。
テーブルに並べて、リモコンでテレビをつける。
現在八時二〇分。
女性の天気予報士が慣れた手つきで棒を操り、スクリーンを太陽のマークで埋め尽くしていく。
「北海道は青空が広がるでしょう。気持ちの良い一日となりそうです。東北も爽やかな夏晴れになるでしょう。関東も雲一つない快晴で洗濯日和となりそうです。中部は透き通るような晴れ、北陸も突き抜けるような青空となるでしょう。近畿圏も絵に描いたような晴れ、山陰は良い感じの晴れ。山陽はまさに晴れでしょう。四国、九州、沖縄、晴れ」

まあもうすぐ八月ですしね。
トーストをかじる。
味がない。
無塩バター。鮮やかなレモンイエローだけど、あんまり味はしないんだなあ。
なんかがっかりだな。
まあ悪いのは無塩バターじゃないけど。
ラグビーの選手に無理やりアメフトやらせて、がっかりするのと同じ理屈だけど。
しょうがない、醤油でもかけよう。一晩中冷蔵庫で寝かされたキンキンに冷えた醤油を。
そんなこんなしてたらいつの間にか天気予報は終わっていて、朝の健康のコーナーに切り変わっていた。
視聴者から送られてきた健康の悩みや相談に専門家が答えていく形式。ちなみにＮＨＫ。
ナショナル・ジオ・グラフィック。
それを横目に、私はボーっとしながら何かを思い出そうとしていた。
なーんか。
さっき良いことを思いついた気がしたんだけどなあ。
なんだったけ？

（テレビのアナウンサー）
続いては範馬勇次郎さんからのご相談です。
私は毎朝生卵を八つ食べているのですが、健康に影響がありそうで少し怖いです。やっぱりやめた方がいいですか？
ということですが、佐藤さん、その辺りはどうなんでしょう？

専門家の佐藤：
八つですかあ。まあ、生卵もプリン体といえばそうですから、取りすぎるとやっぱりあんまりよくないですよね。コレステロールとかありますし。バランスよく食事をされるのが一番だと思います。はい。

私はトーストをかじった。
醤油パンは案外おいしかった。
食器をシンクの中に突っ込んで、水で浸す。
さて。暇だし散歩にでもいこう。
上はそのままオフショルダー。下は洗濯籠から引っ張り出したヨレヨレのＧパンを履く。ブラウンの太いベルトで締めて靴下はマゼンタ。
ネイルが剥がれかかっていたので新しく塗りなおす。
やはりマゼンタ。なんでかわからないけど、マゼンタが自分に一番似合っている気がする。もしかすると、そういうカラーの人間なのかもしれない。
知らんけど。
持ち物を確認する。焦げ茶の財布。スカイブルーのウォークマンと同色のイヤホン。Ｄｉｋｉｅｓの黒い肩掛けバッグ。部屋のカードキー。ブックカバーと小説。今日返却期限の古い映画。帽子――はいらない。多分ね。
時計は九時半を回っている。ドアの前で一つ伸びをする。ウアーア　アー　アー　ウーン　ウーン
あ。
うああああああああああああああああああああああああ
あああああああああああああああああああああああああ
あああああああああああああああああああああああああ
あああああああああああああああああああああああああ
あああああああああああああああああああああああああ
イヤホンを耳に装着。おまかせチャンヌー。流れ出すオルタナティブロック。柔らかい歌声に裏拍のピアノが躍動して良い感じですわ。新しい一日に新しい音楽。新しい世界への入口。
さいこー。
渾身の力でドアを蹴破った。バチコーン。
あっっっつい。
えぐいぐらい暑い。
半端じゃない。
馬鹿じゃない？
でも行きます。
散歩が好きなので。
カンカンと音が鳴る通路、所々錆びて穴が開いている階段。そのすべてがロケンロウ。
空は嘘みたいなブルーだった。まさにスカイブルー。
たなびく雲は嘘みたいな白。まさにクラウドホワイト。
だせえな。
駐車場のトラックの下で猫が涼んでいた。私の足音を聞きつけたのか、ピクリと耳を立てた。
だがしかし。
動く気配はない。
あいつ私のこと舐めてんな。ああ間違いない。チヨコレイトよりも甘い人生を送ってきたんだろうな。
そんな奴には手を出すまでもない。
目の力だけで十分。

ふっ！

あいつたぶんボブ・サップのペットかなんかだな。
たぶん。
駐車場を抜けて左に曲がれば、そこに下るは「非弱な男子大学生殺し」の異名を持つ激坂、男坂。遠くに見えるのが海沿いの街である。
ゴミ袋山盛りのゴミ捨て場を見て、燃えるゴミを捨て忘れたことに気づく。なんてこったい。
道路に描かれた「止まれ」は、もう何百回踏まれてきたかわからないほど擦れている。
でも踏むー。
徐々に足取りが音楽に乗り始めた。
くねり、踊り、跳ねり、そろり。そろり。
ピアノの音に合わせて決めポーズ必須。
右に、左に、一つとして同じポーズは取らないのが、踊り場ダンサーの生き字引。
これだけは譲れないところ。
もうすぐ曲が終わる。
クライマックス。ベイマックス。
右手は顔に、左手伸ばして、右ひざを立てて、左ひざを下ろす。
完璧。
日焼け止めを塗っていなかったことを思い出し、道路わきで塗る。華奢な肩、細い二の腕、健康的な美脚。
妄想。孟宗竹。
ついでに自販機でジュースでも買おう。
マウンテンデュー。マウンテンデュー。みんな大好きマウンテンデュー。緑と黄色の怪しいジュース。見た目は完全にパワージュース。でも違う。ほんとはただの炭酸ジュース。
１５０円を入れ、マウンテンデューのボタンを連打する。ボクサーのパンチより速い。
売り切れ。
キレそう。
仕方なく三ツ矢サイダーのボタンを押す。
ピピッ　ガコンガコン　と音がして、なぜかアクエリアスが二本出てきた。
喜ぶべきか悲しむべきか。
鞄の中にブルーの飲み物を二本入れる。ブルーな気持ち。ブルーなだけに。
今のはアクエリアスの缶の見た目が青いからブルーって表現できるっていうのと精神的な面で落ち込んでる時にブルーっていうからその二つの表現が良い感じにかか
仕方ない。開けるときには自分でプシュッと言おう。
炭酸のつもりで飲めば、それはもう炭酸だから。
イヤホンをそっと外し、ハンカチで拭く。
蝉がうるさい。
えぐいぐらいうるさい。
半端じゃない。
でも偶にこうしてイヤホンを拭いとかないと、耳の中が蒸れちゃうからね。へへっ。
さて。散歩の続きをしよう。
目指すは海。砂浜。海岸線。
いいね。夏らしいじゃん。
ここから海岸線までは十五分くらい。
まだまだ一日は始まったばかりです。

坂を下りきって商店街に入ると、数人のおじさんおばさんに声を掛けられた。手を振ってお返事。オーヘンジ―。
あんまり話し込むと縁談を持ちかけられたりする。だからサラダみたいにサラッと流す。結婚はまだ早い。
知らんけど。
やがて潮の香りが強くなって視界が開けた。
でかい道路を挟んでその向こうが海。どこまでも広がっている。堤防がずっと続き、砂浜はほとんどない。
つまりビーチとしてはイマイチ。
夕陽なんかは観光客に人気らしいけども。
人通りは少ないわよね。
横断歩道を渡って海側の遊歩道へと向かう。
海面は日差しのプレッシャー浴びて乱反射。
これなんの曲だっけ。
再びイヤホン登場。再生ボタンを押して、何が流れるかワクワクして待つ。
一息おいてボーカルが叫んだ。
スピードッ！
しゃおらあ。イエーイエー。さいこー。
自然と歩が速まって、徐々に小走りに。
Ａメロ。
タッタッタッタ
Ｂメロ。
トタトタトタトタ
「もう帰らないぜ、ワンツースリーッ！」
サビと同時に右足で強く地面を蹴り飛ばした。続いて左足でもっと強く地面を蹴る。トップギアで駆けだして、スピードを捕まえる。
速い。めちゃくちゃ速い。ウサインボルトの三倍速い。
それはない。
犬を連れたおばさんを追い越し、車道の自転車に追いつけ追い越せ。髪が頭の上でブワブワ暴れている。肩の紐が外れんばかりに動いている。

まだいける。もっといける。
前方に車除けのガードが三つ。勢いを落としたら自転車に負ける。恐れるな、突っ込め！
ひらりひらりと勢いを落とさずに障害を突破する。
最高だ。
パルクールみたい。
自分の道は自分で切り開けってさ。
カッコいいね。きっと多分人生もそんな感じだ！
知らんけどな！
風を感じて、スピードを捕まえて、私は今、少しずつ沈んでいく太陽の１０倍も速く走っている。
太陽ぜんぜん沈んでないけど。
このスピード感がロックンロール。人生はロックンロール。平成最後のロックンロール。
さよなら。
脇を自転車がすり抜ける。

ＦＥＷ　ＡＦＴＥＲ　ＭＯＭＥＮＴ……

コヒュー、コヒュー。
もう少しも動けない。ＨＰゼロ。すべての体力を使い果たした。
でも風は吹いてるぜ。涼しいぜ。そうやって寝っ転がってるこの堤防の上。
体勢はそのまま、ぐったりとした腕で鞄の中を漁る。
ひんやりとした缶の感触。
ブルーのパッケージ。
そういえばさっき、アクエリアスを買ったんでしたっけ。
人生ってのはうまく出来てますね。
マウンテンデューなら死んでた。
マウンテンデューが悪いわけではないけど。
ゴフゴフしながらアクエリを半分程飲んだら、ほんのちょっと体力が回復した。そろそろ起き上がらねば。通行人がこちらを見ている。このままでは救急車を呼ばれかねない。
三人くらいの男が声を掛けて来た。チャラい、大学生くらいのチャラい男たち。みんな半袖のチェック。
つまりチェッカーズ。
むくりと体を起こして、丁重にお断りする。
何か飲み物買ってきます？　とか聞かれても、残念ながら私にはアクエリが二本もある。まあ実際は三ツ矢サイダー一本分だけど。
お茶しません？　と食い下がってくる。
しません。悪いね。
チェッカーズは残念そうに、別の女性を探しに行った。
私って案外いけてるかも。
髪ボッサボサだけど。
そういえばアクエリを開けるときに、プシュって言い忘れた。やっちまったな。どうでもいいけど。
近くの売店でソフトクリームを買う。真っ白いやつ。階段に座って海を眺めながら食べる。
海青い。ヨットは黄色い。くも白い。
学生たちはまだまだ青い。
そういえばさっきのチェッカーズの一人、なんか誰かに似てる気がする。
あれは――大学のサークルかな？
懐かしいね。もう四年前とかになるんだ。
私が唯一所属していたサークル。
八王子キャンパスを都心に近づける会。
今考えたって政治経済学部だけ八王子ってのは不公平ですね。他の学部生はみんな都心のキャンパスなのにさ。まあ長万部とかに飛ばされるよりはましだけど。
長万部。北海道南部。交通の要衝。
でもやっぱり八王子だもんなあ。
あんまり言うと青梅市民に怒られるけどさ。
でもやっぱりおかしい。
あの頃は青春してたなあ。
年に一回、みんなで集まって、キャンパスを都心に向けて押すわけよ。そーれっ、そーれっ、て八回くらい。終わるとみんな満足そうに汗を拭いてさ。
労力の無駄。無駄な労力。
でもさ、無駄なことを一生懸命やるってとこに、魅力を感じてたんだろうね。きっと。
人生ってずっとそんなもん。
知らんけど。
ここで煙草をポケットから取り出してさ、安いライターなんかで火を着けたら、凄くカッチョいいんだろうな。煙草吸わんけど。
自分でも煙草を吸ったら凄く似合うんだろうなって思うし、周りからもそう言われるけど、どうも煙草ってのは好きになれないね。なんかあの、全体的にくすんだ感じの色合いがさ。
ニコチン。タール。一酸化炭素。
たばたばの三大有害物質。
まあ好きになる必要もないんだけど。
大学の喫煙所とか苦手だったね。空気は淀んでるし、怖い人ホイホイみたいになってたし。
大学ねー。学生かー。いいね。学生ってのは。学校っていう一つの帰属集団があるし。学校。

学校？
そうでした。
学校に行こうと思ってたんでした。
でかい欠伸のせいで忘れたんだな。きっと。
ちなみに起きてすぐに大きな欠伸をすると、脳の前頭葉だか何だかが作用して、記憶の２％くらい失われるらしい。だから起きてすぐに欠伸は良くないって話。
嘘だけど。
さて、じゃあ、めでたく思い出したことだし、さっそくあれだね。
お昼ご飯を食べに行こう。
お腹減った。
私はよっこらせと立ち上がり、てくてくと売店の方へと向かった。
いらっしゃーい。とおばさん。
冷房はガンガン、お日さまカンカン、にんじゃり
冷房万歳。発明した人天才。それ平賀源内。
違うな。間違いなく。
店内は六割ほどの埋まりようだった。いそいそとカウンター席に座り、おしぼりで手を拭く。水はセルフサービス。テレビがワーワーうるさいから何かと思えば。
甲子園ですか。
子供のころは、年上の凄い人たちって感じで見てたけど、今は何かあれだね。変だね。私の歳はいつの間にか高校球児を追い越しているね。なんでだろうね。時の流れは平等なのにね。それにしてもあれだね。泥だらけになって。仲間と涙して。高校球児は凄いね。私の何倍も凄い。
あれ？
僻みかな？　妬みかな？　嫉みかな？
全部読めたら漢検２級。おめでとうございます。
やかんの麦茶をコップに注ぐ。
いつものでいいのよねー？
おばちゃんに手をひらひら。
世の中にはそば・うどん論争というものがある。そばとうどん、どっちが凄い？　ってやつ。
つまり、きのこ・たけのこ論争と同種。
どうでもいいっちゃどうでもいい。だってどうでもいいから。でも争いたくなる気持ちもわかる。似た者同士のように見えて、それぞれ個性がある。それってつまり好敵手ですよね。
個人的にはうどんもそばも好きだけど、そば湯が飲めるっていう点では、そばの方が若干お得な感じがする。
まあ、いつも頼んでるの山菜うどんですけどね！
夏だから今は冷やし山菜うどんですけどね！
キノコを入れるか、入れないかは自分で選べるのだ。
世の中にはキノコ嫌いな人、結構いるもんね。
キノコ。特段嫌いじゃないけどさ、わざわざ入れなくてもいいかなって思う。キノコ味無いしね。この世から死滅すればいいのにね。
店の窓の向こうには、ブルーの海とブルーな空が広がっている。どっちもブルーなのは当たり前。海は空を映してるだけ。その向こうに、巨大な雲が見えるのはきっと気のせい。
たぶんね。

店から一歩出ただけでこれですよ。
グラグラグラーって。
また一段と暑いですね。もう湯気立ってるよ。アスファルトから湯気立ってるよ。
さてさて、どうしますかね。
学校といっても三種類あるからね。
小学校、中学校、高校。大学。四種類だわ。
まあいいや。
大事なのは何種類学校があるかじゃなくて、どの学校に行くかだから。
街が喧騒の様相を示す昼下がり。
水色黄色の縞々の浮き輪を持った子供が、脇をすり抜けていくよ。そんで無駄に上半身をアピールしている若者どもの群れが、向こうからオラオラとやって来るよ。
大した筋肉ですね。
まあでもさ。君たちさ。ティラノサウルスの方が強いよ。三倍くらい強いよ。爪あるし。
知らんけど。
数人のきもい目を振り払うように、目の前の横断歩道を渡って、向かいの歩道へと移った。
さらば若人。嫌ですね。夏は。
そのままレンタルショップに入る。
青と黄色の看板が目印。
返却ボックスに映画をぶち込み、旧作映画コーナーを物色する。
何が良いでしょうね。ガス燈。駅馬車。市民ケーン。
カンフーハッスルでいいや。
どうせまた放置して、返却期限前日の夜中とかに思い出して、徹夜で見る羽目になるんだろうけどさ。それでいいのよ。それがいいのよ。
人生なんてそんなもんよ。
知らんけど。
しっかし肌寒い。屋外と店内の寒暖差激しい。
体調悪くしそう。かなくりしそう。

セルフレジでとっとと映画を借りて、とっとと外に出よう。暑い方がまだまし。
ということで小学校に行きましょう。ここから一番近いし、校庭解放してるだろうし。
しばらく海沿いを歩いて、住宅街へと入った。
閑散とした住宅街。小学校は坂を登った上。
三十度くらいありそうな坂を、ひいひい言いながら登っていく。しんどい。まじでしんどい。汗が凄い。次から次へと滲み出てくるよ。わいの汚濊が全部出て来そうよ。
ふっと上を見たら、まだ坂の半分くらいまでしか来ていなかった。
もうやだ。心折れた。
よろよろと道端の木陰に移動する。ブロックに腰を掛けてアクエリアスを飲む。飲み切る。残るもう一本は大事にとっておく。
汗拭きパッドを取り出して脇と首筋を拭いた。くしゃくしゃに丸めて鞄に突っ込んで、一息つく。
ザザア、と風が吹いて髪が揺れる。
涼しい。
相対的に。
めっちゃ暑いから、風が涼しく感じられるだけで、冬に吹いたらマジで熱風だからな。謙虚でいろよ。
目の前をえんじ色の車が通り過ぎていく。えんじ色。またの名を早稲田色。
優雅だなー。
車輪てのは、唯一人間が発明したもの、とかいう話をどっかで聞いたことがある。人間は何かを創り出すときに、大体のものを自然から真似ているとかなんとか。あの空で雲を引いてる飛行機も、魚とか鳥とかの形状を真似ただけ、てこと。
つまり自然には敵わないってこと。
逆立ちしてもね。
そもそも自然て争う相手じゃないんじゃない？
知らんけど。
人は愚かだなあ。深いなあ。
まあね。どんなに話をでかくしてもね、この坂を登り切らなきゃいけないっていう事実は、消えないんですけどね。
さて。まずは一歩を踏み出すところから。何事もね。
千里の道も一歩から。Ｂｙ　老子。
残りの坂は、案外あっさり登ることができた。
老子のおかげではない。おじいちゃんとアクエリアスが勝負したら、勝つのはアクエリアスだから。
つまり、アクエリアスパワー。
でもやっぱり私は炭酸の方がいい。
十分くらいで小学校に着いた。かつて通っていた小学校。倉戸小。
なつかし。何年ぶりだろ？
かれこれもう十三年？　四年？
緑色の正門も、名もなき作者の壁画も、なんか家っぽい形した時計も全然変わってない。
私はガラガラと正門を開けて、ガラガラと閉じた。
赤い階段を十二段、きっかし登る。小１でも登れるように、低く、幅広い。
目の前に、誰もいない校庭が現れる。
なんだか凄く静かだ。
右最奥のバックネットも、左奥の大小さまざまなタイヤたちも、手前左の遊具たちも、今は寂しく佇んでいる。
遊び相手がいないから。
遊び相手として作られたのに、肝心の遊び相手がいなければ、ただの虚無。中身のないものが、外見だけを整えて存在している。その辺のウェイみたいな？
たぶん違うな。
遊具は悪くないけど。
カラフルな色をした象の山。青いジャングルジム。塗装のはげた登り棒。真っ赤なブランコ。そして新顔の滑り台。めっちゃ滑りそう。
私はブランコに向かうと、腰を掛けて揺らした。
キイキイと音が響く。何千回、何万回と鳴らされてきた音。今は私だけの音。
目を閉じて耳を澄ます。
こうしてると、色んな声が聴こえてくる気がする。運動会のレースの音。プールで先生が鳴らす笛の音。体育館でバスケットボールが跳ねる音。金属バットの鋭い響き。カキーン。白球は青空の彼方へ。
気のせいだけどね。
つまり、在りし日の残像。
私は遊具コーナーをひとしきり楽しんだ。
ブランコはとにかく強く漕ぎ、ジャングルジムはてっぺんで手を放し、登り棒を登った。
新顔の滑り台は、全然滑らなかった。
つまり期待外れ。
断じて、でかいケツのせいではない。
カラフルな象の山は、座ること以外に特にやることがない。要するに置物である。私よりずっと前の卒業生の卒業製作らしい。
そういえば。
私の代の卒業製作って、なんだったけ？
・・・

・・・
・・・
タイムカプセル！
そうでした。タイムカプセル埋めたんでした。
どこだっけ。どこだっけ。
そう。それは中庭。
面白くなってきたじゃないの。
大人になった自分に宛てた手紙じゃなかったかな。いや、将来の夢だっけ。
まあいいや。掘り出せばすぐにわかる。
忙しくなってきたよお。
昇降口の前を素通りして、脇のトンネルみたいな通路を抜けたら、そこはもう中庭ですよ。
姿はてんで変わってないさ。
四方を校舎に囲まれ、中心にケヤキの木がある。
まあまあでかい。
校歌にある、「武蔵野のケヤキ」。
同じ地区にケヤキ小ってのがあるから、あんまりでかい顔はできてない。悲しき哉ケヤキ。
確か、中庭の隅にある灰色の倉庫に、園芸道具が詰まってた気がするのよ。私の背丈より少し高い。扉には当然鍵がかかっている。三桁のダイヤル式のやつ。変わってなければ８１２。
ある日の放課後を費やして、調べ出した数字。８１３回鍵を開けようとした成果。
果たして。
開いた。凄いね。１０年以上このダイヤルは、同じ数字を保ち続けてきたんだね。感動だね。
ある意味タイムトラベラー。
ガラガラと音を立てて扉をあけると、ムッとした熱気があふれて来た。踏ん張らねば尻もちをつきそうだ。なんかよくわからん緑の芝のマットをかき分けて、奥からシャベルを取り出す。
さすがに手で掘るのは無理。手の先がユンボみたいになってたら話は別だけど。
シャベルを手に、意気揚々と向かうはケヤキの木の向こう側。ケヤキと飼育小屋の中間地点。
タイムカプセルはそこに埋めたはずだと、向かってみたら。
なんかトーテムポールがいっぱい立ってた。
八本くらい。
トーテムポール。インディアンの守り神。
タイムカプセルから芽が生えて、守り神になったとさ。
これは掘れない。無理。トーテムポールが倒れる。
ということでシャベルは返却。虚しい気持ちで倉庫の扉を閉める。
頭をガシガシと掻く。
まあしょうがないかあ。トーテムポール立てた人を、訴えてもしょうがないし。勝てる見込みもないし。
でも知りたかったなあ。昔の私は何を書いたんかな。
タイムトラベラーになれたらな。
ザアアと風が吹く。涼しい。
この中庭、入り口と出口が直線状にあるからか、昔から風が良く通る。
つまり風の通り道。風の古道。日差しもあんまり入ってこない。
ということで。
ベンチに座って本でも読もう。
まあでも、知らない方がいいのかな。とか思ったりする。昔の夢とか、希望とか、不安とか。置いてけるものは置いてった方がいいんだろうね。きっと。持ちきれなくなるし。旅の荷物は、なるべく少ないほうが良い。
ありがとう。トーテムポール。
鞄から本を取り出す。それから３０００円のブックカバーと５００円の栞。ブックカバーは友人にあげようとして、結局あげなかったやつ。本より余裕で高い。
村上春樹。二冊連続では読めない。でも面白い。
つまり、味の濃いシチューと同じ理屈。
知らんけど。
私は本を開いた。
自由意志は失われた、と「僕」は言う。
自由意志。つまり自由な意志。
サルトル、ホッブズ、ルソー。
ルソーは関係ない。
自由になにかを生み出そうとする意志。
それぐらいは人間の持つべき権利、いや、人生を送る上で持つべき権利だろうか。とか思ったりする。
さあね。
難しい話は好きじゃない。嫌いでもないけど。
思考実験なんかは面白いと思うけど。
シュレディンガーの猫とか。快楽装置の実験とか。世界五分前誕生仮説なんてのもあったような。
文学はすでに完成されている。これは私の仮説。
夏目漱石。森鴎外。川端康成。芥川龍之介。志賀直哉。
日本の五大文豪さんたちその他が、文学を完成させてしまったわけで。だから村上春樹なぞが登場したわけ。
まあ「この」五大文豪を選んだのは、村上春樹なんですけどね。
まあいいや。
なんにせよ「僕」は生き続けるだろうね。

そういう意志を持ってる。
キーンコーンカーンコーン、とチャイムが響いた。
聞き慣れた学校のチャイム。
カッコよく言えば「ウェストミントスターの鐘」。
さらに言えば「グレートセントメアリー教会の鐘」。
作曲者はヘンデル。
諸説あり。
なんだか眠くなってきた。
寝よう。寝られるなら寝たほうが良い。きっとね。
おやすみ。

目が覚めたのは午後の五時。目が覚めた理由は、チャイムが鳴ったから。寝てたのはざっと二時間くらい。寝すぎ。高杉。出木杉。
目をこすり、大きな伸びをする。
地面には放り出された本。丁寧に栞を挟んで鞄に入れた。
その時。
背後に何らかの気配を感じた。
バッと振り返る。
何もいない。トーテムポールしかいない。
できれば何かがいてほしかった。
チラッと視界の端で何かが動く。
右奥。体育館へと続く通路の先。人影らしきものが体育館へと入っていく。
子供？
そういえば体育館の中はどうなってるんだろう。
気になったら終わりですよ。そりゃね。
ステージの古臭い幕は一新されただろうか。天井に挟まってたボールたちは救出されただろうか。

ということで体育館へと向かう。
通路は体育館の前で二手に分かれる。真っ直ぐ行けば体育館。左に行けばプールに続く。
入り口で靴を脱ぐ。モスグリーンで縁取られた、オレンジ色のナイキシューズ。
白い下駄箱に揃えて入れる。
カッコいいけどしばらくおさらば。
まあ盗む人もいないだろう。
ということで深呼吸してドアを開けると、中から空気がゴオッと出てきて、私の横をすり抜けていった。
中は薄暗い。
そして誰もいない。
静かに一歩、体育館の中に足を踏みいれる。
校庭と同じく一切の音がしない。ボールが弾む音も、シューズがキュッキュ鳴る音もしない。
全ての音が、灰色の中に吸収されているようだ。
人の気配はない。子供の姿もない。
正面のステージの幕は開いていたが、グランドピアノが置かれているだけで、誰かがいるような気配はない。
天井のボールは救出されるどころか、新しい犠牲者が何個か追加されていた。
さてさて。子供はどこに行ったんだろうね。幽霊じゃないと思うんだ。走っている足音がしたからね。
真っ直ぐにステージに向かい、脇の扉を開けて、左袖の空間へと入る。いるとしたら裏方でしょう。階段を登り、積み重なったマットをよける。誰もいなさそう。ステージ裏の狭い通路も確認する。跳び箱やら緑のマットやらが散乱している。大人が通るにはやや狭い。向こうに見えるのは右袖。
私は左袖を見回し、ステージ上を通り、右袖に向かった。

やはり誰もいない。
そしてホコリが多い。とにかくホコリが多い。
せっかくのマゼンタがグレーになるくらいホコリが多い。
近くに積まれていた深緑のマットに腰かける。
人影を見たのは気のせいかな。いる気配ないし。
でもなーんか引っ掛かるんだよなあ。
うーむ。
ガタン、と遠くで音がした。
ガタン、と音を立ててステージに出てみる。子供らしき影が正面入口から走り去っていくところが見えた。
やっぱ気のせいじゃなかった。
でも追いかけない。疲れた。アイス食べたい。
五時半のチャイムが体育館の中まで聞こえてくる。
もうすぐ夕暮れ。
このまま帰ってもいいな。でもせっかく学校に来たんだし、屋上で夕陽でも眺めようかしら。
たまには夕陽を見て、センチメンタルになってもいい。きっとね。
入口でナイキの靴を回収。プール横を抜けて本校舎へと向かう。西階段を登り二階へ。また登り三階へ。職員室の前を通り東階段へ。
職員室。懐かしい響き。職員のための部屋。
光が灯っているので、流石に息を殺して通り過ぎる。
見つかったらどうかな。怒られるかな。
東階段を登り、四階踊り場へ。
屋上へと続くドアには、鍵が掛かっている。
今度は五桁のダイヤル。
変わってなければ９１７２０。

ダヴィンチ・コードの暗号と同じ。
たぶん違う。
ゆっくりとダイヤルを回していく。まずは９から。次に１。真ん中のダイヤルは錆びついていて、非常に回しにくい。７。２。０。全てのダイヤルを合わせると、カチリ、と音がして鍵が開いた。
ドアノブに手を掛け、回す。
そこでふと、踊り場の右側に、見慣れないドアが存在していることに気がついた。真っピンクに塗られていて、５１５号室と貼られている。記憶の中では、こんなドアは存在しない。
５１５号室？
なんだろう。すごく開けたい衝動に駆られる。これはきっと私のドアだ。と直感が叫ぶ。私が望んだ、私のためのドア。
開けたらきっと、突拍子もない物語が始まるんだろうね。心湧き立つような、そんな物語が。
でもこれは抽象的な話。
つまり、開けないほうがいい。きっとね。
私は屋上へと続くドアを開けた。
随分と涼しい風が吹いている。昼のもしょもしょした猛暑はどこかへ消え失せて、身を潜めているらしい。
まっすぐ前には住宅街の街並み。遠くには脈々と続く山並みが見える。気取って言えば蒼氓とした山嶺。右手には坂と海。左手にはソーラーパネルが並んでいる。
ソーラーパネル。またの名を太陽光発電。
夕陽は今まさに、海へと着水しようとするところ。
真っ赤に燃える太陽。オレンジに染まる街並み。それを遠くで静観する山々。
凄いね。感動しちゃった。なんかあれだね。こういう景色を見ちゃうとさ、人生も悪くない、なんて思えちゃったりするよね。
要するに、気分が盛り上がってるんだね。
いい景色に、いい気分。そこにいい言葉なんかを添えたくなってくる。
リブアライフ。ユーウィルリメンバー。
「記憶に残る人生を生きろ」ってさ。カッコいいね。
アイビリーブザヒューチャー。ワッゼイカム。
「何があっても未来を信じている」。
悪くない。ちょっと臭いけどね。
イキトシイケルスベテノモノへ。
うん。まあ。これはちょっと違うな。
なんにせよセンチメンタルだ。壮大で、美しくて、どこまでも広がってく感じ。
フェンスに寄りかかって夕陽を眺める。
結局はさ、気分屋なんだろうね。私は。何をするにしてもその場の気分で乗り切ってしまう感じ。だから大抵のことは三日も続かない。
日記はいつも最初の二行で力尽きる。ぶら下がり健康器は一日で物干し竿になる。習い事も、数えきれないほどやめてきた。バイオリン。ピアノ。スイミング。書道。
続かない。夢がない。テルアライ。
良くないな。これは良くない。センチメンタルはこれがあるから怖い。内省に走ったら止まらない。
夕陽はどんどんと海に沈んでいく。
私は腕を組んで、フェンスに寄りかかる。
なんかあれだ。映画のラストシーンみたいだ。無駄に難解で、物語はめちゃくちゃで、何を伝えたいのかわからない映画。で、結局最後は主人公が、屋上から飛び下りて死ぬ。オチは大体そう。誰かが死ねばオチると思ってる。
まあ飛び下りませんけど。死にたくないので。
フェンスから校庭を見下ろしたら、さっきの子供と思われる少女が、校門から出ていくのを見つけた。
やっぱ幽霊じゃないよね。
でもなんだろうね。この感覚。なにか変だ。
そういえば。
昔。子供のころ。学校のない日に校舎に忍び込んだことがあったっけ。うん。あったわ。怖い物見たさに溢れてたんだね。きっと。そん時に私、変な大人を見かけた気がする。見たことない人だったけど、追いかけて来たから先生かと思って、体育館に隠れたんだっけ。
……あれ？
夕陽はもうその姿をほとんど隠していた。辺りに少しずつ巨大な影が訪れる。
毎日がキャンバスならいいのにね。
真っ白で巨大なキャンバス。
そうすればさ、新しい色で古い色を塗り替えることができる。昨日は青だったけど、今日緑で塗り替えればいいや。みたいにね。
月並みかな？
なんでもいいけど。
それに、何の色を塗るかじゃなくて、どう塗るかって話なんだろうね。
きっとさ。
それでもやっぱり。
それでもやっぱり、毎日がキャンバスならいいのに、って思うんだ。
微かな光を残して、太陽は姿を消した。
一息おいて学校にチャイムが鳴り響いた。

さあ。完全下校の時間だ。帰ろう。
足元が見えなくなる前に帰った方が良い。
下校の音楽は流れないけどさ。
お腹減ったなあ。夕飯。何食べようかな。
近くのスーパーに寄ろう。商店街の人達には悪いけど、今日はスーパーに寄りたい気分。
９が羅列された値札を熱心に眺める。
トマト。三つで１９９円。安いけど買わない。大根半分。７９円。これは買う。夏蜜柑。熊本県出身。一個６９円。高いけど、サイズは大きい。手からほんのりと柑橘系の匂いがする。いいね。買っちゃう。梶井基次郎もこんな気分だったのかね。もやしが１９円。買わない。もやし業者って、もやしが売れれば売れるだけ赤字なんすわ。かわいそう。一尾９９円の立派なあじ。これは買いですね。そのとなり。さんまが一尾２９９円。近年まれに見るさんまの大不漁。この値段で買う人おるんかいな。続いて木綿豆腐。一丁４９円。買う。納豆はいいや。代わりにパンを買おう。６枚入りイーストフード抜き。１３９円。ガリガリ君６０円。買う。
そういえば昔、１００点のテストを親に見せたら「三桁で一番小さい点数だね。偉い偉い」って言われて、それがめちゃくちゃ悔しかったから、なんとか９９点を取ってやろうと奮闘してたな。
すごく馬鹿だったな。
お会計は５３０円。６００円払って７０円が返ってくる。レジ袋を片手に自動ドアを抜けると、もうすっかり外は暗くなっていて、街灯がチカチカ光っていた。
ガリガリ君を片手にスーパーの裏手へ。
従業員の自転車とフェンスだけの空間。知られざる穴場スポット。ここから港町と海を見下ろすことが出来る。
商店街の電灯、海岸線の街灯、船の夜光。
夜景としては１００ドルくらいかしら。
神戸の１万分の１。しがない港街ではこれが限界。
ちなみに神戸の１００万ドルの夜景って、電気代にすると、ほんとに１００万ドルらしい。
でも一ドル三六〇円の時代の話。
シャリシャリ、とガリガリ君をかじる。
私は今、６０円のアイスをかじっている。そしてあの船の光の向こう。のさらに向こう。のさらにずっと先にいったところ。三和人材市場では、夢を失った若者たちが、腐ったパンを食って生きている。
国破れて山河在り。夢破れてパンが有り。
でもそれは、ずっとずっと遠いところの話。
つまりそういうこと。
夜景もまたセンチメンタル。気を抜けば感傷に走る。
問題はそれが気持ちいいってことだ。
途中で自転車とすれ違いながら、えっちらおっちらと坂を登ってアパートに向かった。
部屋のドアに辿り着いた時には、夜の７時を回っていた。
カチリ、と鍵を開け、ガコン、と鍵を閉める。
狭い玄関。狭い廊下。なんだか朝より狭く感じる。
つまり、それぐらい疲れている。
鞄を床に放り投げる。
アクエリアスが変な音を立てて、鞄から飛び出る。
キッチンへ。
まずは米を研いで米を炊く。炊けるのは一時間後。
長ネギと豆腐半丁、それから大根のほとんどを味噌汁にぶっこむ。あとに残ったのは、大根のしっぽの方が少しだけ。
残った豆腐は、明日冷ややっこにでもしようかな。
あじは弱火でじっくりと。
その間にお風呂を洗ってしまおうホトトギス。
今日は疲れたし湯船につかりたいわけ。
しょうもないバラエティーを見ながら、しょうもない気持ちでご飯を食べる。別に淋しいとかそんなんではない。ただきっと、ちょっと疲れただけ。
お風呂では歌を唄う。
気持ちいいね。たぶん隣の人にも聞こえてるんだろうけど。まあお互い様ってことで。
風呂から上がって、うさぎのＴシャツを着る。耳が長いやつ。このうさぎは可愛い。リアルなうさぎは好きじゃない。
歯はめっちゃ磨く。とにかく真っ白になるまで。口の中がミントで溢れだす。
ぐちゃっとなったキッチンの片付けは、明日の自分に任せるとしよう。明日の自分、がんば。
色鮮やかな夏蜜柑、それから鞄に残ってたアクエリアスを冷蔵庫に入れる。
野菜の類は一段目。飲み物は二段目。味噌や豆腐は三段目。
やっぱり納豆買ってくれば良かったかな。
とう、ってつくものが好きなのかな。
とうふ、なっとう、ありがとう。なんつって。
そういえば、冷ややっこって、冷やしてるから冷ややって呼ばれてるわけじゃん？。じゃあさ、冷ややっこに冷やした醤油を掛ければ、超冷ややっこになるんじゃない？
おいおい天才か。

ということで江戸切子の醤油さしを、冷蔵庫の中に入れておく。良い存在感。カッコいいね。
借りて来た古い映画はテーブルの上に置いておく。そもそもこの家に、映画ごときの居場所はない。
本を机の上に投げ出し、ベッドに登る。
ギシギシと効果音付き。
ボフン、と寝っ転がると揺れる。
地震を検知しました。
一応、カレンダーを確認する。なにやら明日の日付に丸がついている。
明日？　明日ってなんかあったっけ。
仕事はあるけど。
・・・
そういえば。
明日は誕生日でしたね。２７歳の。
２７歳？　ほんとに？
３っていう数字すらも突破できない私が、よくもまあ、２７まで積み重ねてきたもんだね。感心しちゃう。
まあでもなんというか、あれだね。ぶっちゃけ、やめたければやめればいいだけの話だしね。
部屋の電気をポチッと消すみたいに。
パチッ。
ＯＮ　→　ＯＦＦ
そういや「ぶっちゃけ」って「打ち明ける」が訛ってぶっちゃけになったらしい。日本語って不思議よね。
どうでもいいけど。
まあでも人生なんて、どうでもいいことの連続だし。
どうでもいいことが人生で、人生がどうでもいいことなんだろう。
知らんけど。
なんにせよライフゴーズオーンだね。人生は続く。
私はきっと、十年後も人生を続けてる。
きっとね。
もういいや。疲れた。
眠い。寝る。
寝られるんだったら、寝ておいたほうが良い。
おやすみ。
そんで私、誕生日おめでとう。
ＺＺＺ